

# 集団のリフレクション能力の育成を目指した指導実践

大久保 圭

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

【概要】本研究は、中学校段階における集団のリフレクション能力の育成につながる指導のあり方を探るものである。中学校段階において、「一人ひとりが自分の積んだ経験や営みを振り返り、それを踏まえて次のステップへ歩み出す力」すなわち「リフレクション能力」を体得していくことが、加速度的に変化していく社会を逞しく生き抜いていくための原動力となっていくと考える。そこで本実践では、集団のリフレクション能力を培う機会の有効性と共に、集団としての育ちがどのように変容していくのかという集団のリフレクション能力の育成の妥当性と課題について考察・検証した。その結果、集団活動のベースとなる人間関係づくりと、特別活動・教科学習が連動した横断的カリキュラムの計画的な設定が、集団のリフレクション能力の向上につながることを示唆された。その集団が安心安全な場であることと、その上での特別活動と教科学習双方の充実が、集団のリフレクション能力の向上に有用であることが明らかになった。

## I はじめに

### 1. 今日の教育課題

知識基盤社会と言われる21世紀において、新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要であることは言うまでもないが、近年、その知識・情報・技術をめぐる変化のスピードが加速度的である。人工知能の急速な進化、グローバル化の進展、それに伴う職業の変容といった社会的変化が、我々の予測を超えて進展するようになってきている。

このような時代だからこそ、感性を働かせて目的を考え出すこと、場面や状況を理解して自分の考えをまとめること、相手にふさわしい表現を工夫すること、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだすことなど、人間としての「特性」を磨くことがより重要となってくる。これからの学校教育には、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力(社会を生き抜く力)の育成が求められている。

### 2. リフレクション能力についての理論的概要

このような社会を主体的に生き抜いていくために、

義務教育段階、とりわけ中学校段階においてどのような力を身につけておくべきなのだろうか。

中学校3年間の間に行われる教育活動は多岐に渡っており、どれも教育的価値の高いものばかりである。それらを一つひとつバラバラなものとして捉えるのではなく、活動と活動のつながりを意識した相乗効果の中で総合的な成長を目指すものとして捉えることが重要ではないかと考える。それらの活動と活動のつながりを考える上でのキーワードが「リフレクション」である。

リフレクションとは一般的には省察・内省の意で用いられる。自分自身の取組を振り返ってその意味を問い直し、これまで気づいていなかった新たな視点を見出していく営みである。また、単なる反省ではなく、常に新たな展望を探ることにつながる、極めて前向きな営みである。これらを踏まえ、ここで言う「リフレクション能力」とは、「一人ひとりが自分の積んだ経験や営みを振り返り、それを踏まえて次のステップへ歩み出す力」と定義する。コルトハーヘン(2010)は、「ALACTモデル」によって「1. 行為→2. 行為の振り返り→3. 本質的な諸相への気づき→4. 行為の選択肢の拡大→5. 試行」が理想的なリフレクションのプロセスであると述べている。リフレクションを効果的に行うためには、ゴー

ルを明確にし仮説を持ち行動すること、そして、何がうまくいったのか、何がうまくいかなかったのか、その経験から何を学び何を得たのかを考察することが重要である。つまり、結果のみを判断材料として考察するのではなく、結果に至るまでの経過に目を向け価値を振り返ること、それをベースに次のステップへどう進むのか考えることがポイントとなる。このサイクルを繰り返すことで自然とリフレクション能力が高まっていき、予測不能な社会を生き抜いていくことにつながっていくと考える。

## II 研究の目的

本研究は、中学校における学級目標達成に向けた教科学習（国語、道徳）と特別活動（学級活動、学校行事）の実践を通して、集団のリフレクション能力を培う機会の有効性と共に、集団としての育ちがどのように変容していくのかという集団のリフレクション能力の育成の妥当性と課題について検証していくことを目的とする。

## III 研究方法

### 1. 対象

穴水町立穴水中学校 2年2組（23名）

### 2. 期間

平成30年4月～平成30年12月

I期：4月～5月

II期：6月～7月

III期：夏季休業中

IV期：9月～10月

V期：11月～12月

### 3. 研究計画

研究の計画は表1のとおりである。

期（期間）		I（4～5月）	II（6～7月）	III（夏季休業）	IV（9～10月）	V（11～12月）
特別活動	学級活動	学級集団実態把握 学級目標設定	学級プロジェクト 始動・計画・実践・省察			これまでの振り返り 学級プロジェクト再開
	学校行事		学級活動からの発展 体育祭・文化祭			
教科学習	国語	自ら学び、他者と学ぶ意義を感じる 「短歌を楽しむ」「字のない葉書」			他者と練り上げ、他者と深める 「卒業ホームラン」「平家物語」	
	道徳	授業スタイルの 確立	自己を振り返る		振り返りのシェア	道徳的实践へ発展
その他の教育活動		人間関係づくり（ミニゲーム）（集合写真コレクション）（バースデーセレモニー）				

【表1】 研究の計画】

## IV 研究実践

### 1. I期（4～5月）の実践

#### ～実態把握と関係づくり～

教科担任制である中学校では、学級担任といっても自分の学級との関わりは1日1～2時間程度である。そのため学級担任は、限られた時間の中で集団の現状を把握し、状況に応じて対応していかなければならない。私は今年度から現校に赴任したため学校の文化もわからず、生徒一人ひとりのことも全く知らない。そこで、まずは生徒一人ひとりの実態と学級の実態を把握すること、教師と生徒との良好な関係をつくっていくことをこの時期のねらいとした。

#### （1）学級・学校の実態

生徒たちは、全体的におとなしく真面目な第一印象であった。関わっていくと、一人ひとりはとても素直で指示されたことややるべきことはしっかりとやり遂げようとするが、反面、集団として自分たちで何かを考え、生み出し、実行するといった経験がほとんどないことがわかってきた。過年度の不登校、別室登校の生徒もおり、全体的に繊細な生徒が多い。小学校の頃から喧嘩やトラブルを避け、固定化された人間関係の中で牽制し合いながら学校生活を送ってきたようである。一見「いいクラス」に見えがちだが、一人ひとりが学級に居心地の良さを感じているようではなさそうであった。授業では、板書を写すことが中心で自分の考えが書けなかったり、発表も書いたものを上手に読み上げるだけであったりと、表面的な学びが気になった。

穴水町立穴水中学校は穴水町唯一の中学校であり、町の期待も高い。教育活動も整備されており、各活動が充実している。教員も統一感があり、組織的な教育活動が行われている。部活動や学校行事など特別活動も盛んである。

## (2) 具体的な実践

### ① 4月17日 特別活動（学級活動）

#### 「学級目標を考えよう」

学級目標は学級のシンボリックな存在であり、1年間かけてどのような学級をつくっていくかという羅針盤でもある。しかし、一般的にスローガンのものや英語で表現したものなど見た目の良さにこだわったものが多く、単なるお題目になりがちである。本学級でも、昨年度の学級目標を語んじられるという生徒はごく少数であった。

そこで今年度は、一人ひとりの思いを持たせたい、思いを表出させたい、自分達のものだという意識を持たせたいという願いから本授業を設定した。それぞれの思いを「漢字一字で表現して伝えよう」という学習課題を設定し、まずワークシートに漢字と字に込めた思いを書き込んだ。それをプレゼン形式で伝え合い、最終的に投票で3つ選ぶことにした。選ばれた言葉は、「虹」と「奏」。どちらも、一人ひとりの個性が合わさって体を成すものである。生徒たちの願いがよく現れた言葉だと感じ、集団としての成長を望んでいることがよくわかった。

あと1字をどうするか待っていると、「あと1字は先生が決めてください」という声上がり、「虹もハーモニー（奏）も一人ひとりの心が大切、自分の心を大切にしてほしい」と言う思いを込めて「心」という言葉を提示した。

こうして、「虹・心・奏」というちょっと変わった学級目標が誕生し、目指すべき方向性が定まった。



【写真1 生徒が書いた学級目標案】

### ② 4月下旬 国語

#### 「短歌を楽しむ」

4月段階で、「国語の授業が好きですか?」という質問に対し、30.4%の生徒は否定的な回答をしている。また、「国語の授業の内容はよくわかりますか?」という問いに対し、34.7%の生徒が否定的に回答している。どうしたら好きになるのか。生徒たちと対

話をしながら掘り下げていくと楽しい=好きにつながるのではないかという仮の結論を導いた。では、生徒にとって楽しいと感じる授業とはどのような授業だろうか。「わかりやすい授業」「笑いがあがる授業」「他者と関わる授業」など生徒たちは授業に対する思いを次々と口にした。その期待する思いに応える授業を、生徒とともに創っていくことを今年度の大きな目標にした。

「短歌を楽しむ」は短歌が詠まれた情景や心情を想像することをねらった教材である。単元末に、自由に想像を膨らませて交流する単元計画を設定した。

本時は、①選んだ短歌について、まずは個人で想像しノートにイメージを記入する。②それをもとに、次はグループで紹介し合う。③グループで練り上げたものを全体で紹介し合う。という授業の展開であった。最初の段階で「自由な想像ってどういうことですか?」「どんな想像でもいいと言われても難しい」など、自由な想像と言われて戸惑う様子が見られ、ノートを書く手が全く動かない生徒がたくさんいた。それが、グループになると自然と対話が増え、楽しそうに活動に取り組んでいた。「正しいことを言わなければいけない」「間違いたくない」という心理からはじめはなかなか書けなかったが、グループ活動が終わったあとの生徒たちの表情は充実感に満ちており、今後の方向性が見えた1時間だった。

- ・最初、自分の考えだけでは不十分だったけど、みんなで交流したら色々な考えが出てすごく良くなった。
- ・友達と想像したことを伝え合い、自分と同じ意見の人もいれば違う意見もあったので楽しかった。
- ・私の班の3人はすごい想像力豊かで聞いておもしろかったし、こんな考え方もあるんだなと思いました。
- ・一人ひとり意見が違うから意見を聞くのが楽しいです。

【資料1 授業後の生徒の振り返り】



【写真2 板書と授業後の生徒の様子】

### ③ 4月～5月 道徳

#### 授業スタイルの確立

「良い悪いではない。本音で語れ！」

道徳は心を磨く授業である。道徳は学級目標の1つ、「心」に大きく関わるものでもあり、本学級の重点取組として位置付けた。「こう言えば嫌なヤツだと思われるかも…。」「本当は思ってないけど、こう言えば褒められるかな…。」など、中学での道徳の授業では本音ではなく授業での見栄えを気にした発言が多い。しかしそれでは道徳的な価値観は育たない。授業の中で教師の意図的な価値の揺さぶりに対し、今の自分の価値観を素直に伝え合い議論できるようにしたいと考え、オリエンテーションの際に本音で語ることを意味を説いた。もちろん、本音で意見が言い合える学級経営がベースにあるのだが…。

質の高い道徳の授業を目指し、生徒たちとどのような展開が良いかを議論しながら会を重ねていった。「今回の導入どうだった?」「問いはどうだった?」など何回かやりとりをするうちに、こちらの意図を汲んだ生徒たちが素直に感じたことを話してくれるようになり、徐々に授業のスタイルが確立されていった。自分のことを真剣に見つめ返し、他者の価値観と比べることで自身の価値観が揺さぶられ深まっていくことを生徒自身が感じているようだった。

- ・導入（5分以内でテーマや資料が連想できるもの。クイズ、歌、動画など）
- ・展開1（資料を範読し、発問は一つ。）
- ・展開2（価値の自覚化。展開1で高まった道徳的価値観をもとに自分に返す。）
- ・終末（振り返りをノートに記述。）
- ・板書は横書き。左は資料について、右は自覚化について。真ん中に高まった道徳的価値観をキーワードで。
- ・発表はランダムで。自覚化はグループで。

#### 【資料2 生徒と話し合っただけのこと】

#### （3）その他の教育活動

授業や特別活動以外にも、学校には様々な教育活動がある。それらの時間も有効に活用することによって、人間関係づくりの基盤となりうると考えた。

ちょっとした時間を利用したトランプやミニゲームでは、はじめはぎこちなかったが回を重ねるたびに歓声や笑顔が増えていった。月1回のバースデー

セレモニーでは、その月の最終日に学級目標（虹）にちなんでレインボーキャンドルを灯し、その月の誕生日の生徒を全員でお祝いすることにした。また、月に1回は集合写真を撮ることにし、教室の背面に掲示していくことにした。



【写真3 教室背面の集合写真掲示】

#### 2. II期（6～7月）の実践 ～可能性の広がり～

I期で把握した実態をもとに、II期では具体的な実践に取り組んだ。

##### （1）学級の実態の変容

スタートから2ヶ月が経過し、集団として変容が少しずつ見られるようになってきた。生徒たちがこれまで当たり前に行っていたことに疑問を感じるようになってきたのである。そしてそれをアウトプットし、生徒同士で話したり教師に話したりする様子が見られはじめた。

##### （2）具体的な実践

###### ① 6月上旬 国語 「字のない葉書」

- ・教師主導の講義型の学習や一方的にやらされている学習では生徒は主体的に参加できない。
- ・1時間毎の振り返りでは単発で終わってしまい、つながっていかない。つながりを持たせるにはどうしたらよいか。
- ・生徒同士の関わり合い、学び合いが充実しなければ質が高まらない。ペアワークやグループワークはやっているが形だけになっていることが多く、深まりがあまり感じられない。学習活動に工夫が必要、且つ、生徒同士が本音で関われる素地が必要。

#### 【資料3 4・5月の実践から見てきたこと】

これらのことから、「字のない葉書」の学習では次のことに重点を置いて単元学習を行った。

○初発の感想から学習計画を立てる

→ 学習の必要感を持たせる

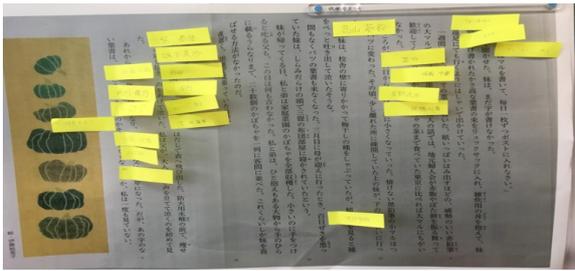
○学習計画をもとに学習を進めていく

→ 生徒が自ら調べ考えられる場を設定する

○単元の振り返りを行う

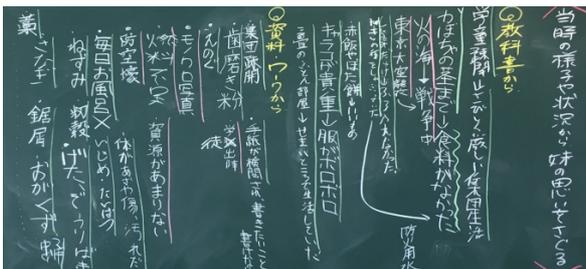
→ 初発の感想と比較することで成長が見える

○第一次、初発の感想を書き、特に印象に残ったところを付箋に書いて伝え合った。



【写真4 拡大した本文に生徒が貼った付箋】

○第二次、初発の感想から作った学習計画をもとに生徒主体で学習を進めていった。



【写真5 黒板を開放し生徒が書いた板書】

○第三次、初発の感想と単元終了の感想を比較した。

**【初発の感想】**

・字のない葉書がどこにいったのかというところが気になった。

**【単元終了の感想】**

・授業を終えた時には、邦子は戦争のことだけではなく父の優しさや家族の大切さを伝えたかったんだとわかりました。

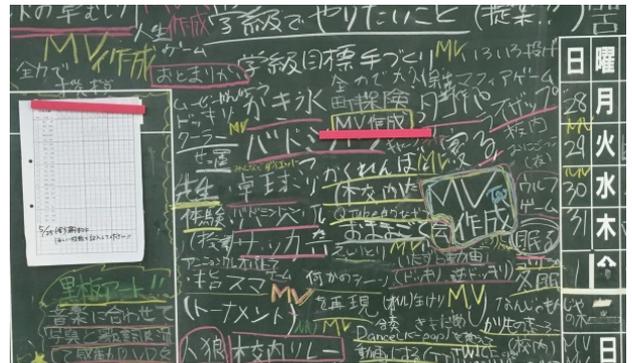
【資料4 同一生徒の感想の変容】

② 6月5日 特別活動（学級活動）

「学級プロジェクト始動」

オリエンテーションでは、この授業のねらいを丁寧に伝え、生徒たちに「常識をぶち壊せ！」と投げかけた。その後、自分たちで企画し、学級でやりたいことをブレインストーミング形式で書き出していった。だが、実際はなかなか書けなかった。経験がないのでアイデアが浮かばない、仮にアイデアが浮かんでも「どうせできないだろう」「無理やって」と自分たちで却下してしまう。そこで、「できるできないをはじめから考えるのではなく、できると仮定してやってみることが大事だ」「実現に向けて、考える、協力する、折り合いをつける」といったプロセスに価値があることを伝えた。すると少しずつ黒板が埋まり始め、しばらくすると書ききれないほどの「夢」でいっぱいになった。

その中から、実際に実現させたい企画を絞ってプロジェクトチームを結成し、実現に向けてミーティングを行った。そして、学活の時間を中心にプロジェクト実現に向けて取り組んでいくことを確認した。その後は、学活の時間にプロジェクト会議を行い、それをプレゼン形式で提案し、質疑応答で精査していくという流れで進めていった。



【写真6 生徒の「夢」が詰まった黒板】

③ 6月11日 道徳

「“集団の中の役割”について考えよう」

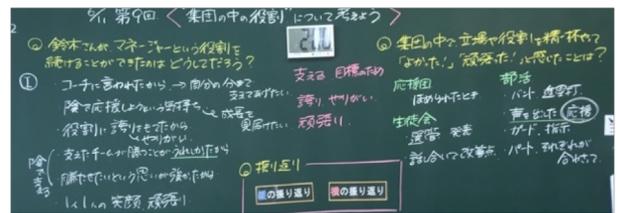
主 題 名：「役割の自覚」

資 料 名：「明かりの下の燭台」

内容項目：役割と責任の自覚・集団生活の向上

【4-（4）】

道徳の授業も9回目を迎え、自分たちで考えた授業展開が定着し安心して学べる環境が整ってきた。それぞれが積極的に考え、それらを伝え合い、価値観の異なる他者との関わりの中で深めていくことができるようになってきた。



【写真7 授業後の板書】

- ・みんなも集団の一員として頑張っていることが伝わってきてよかったです。
- ・みんなそれぞれに頑張っているのがわかったから、自分ももっといろんなことを頑張ろうと思った。
- ・みんな部活のことが多くてびっくりしたけど意見が違っていてもいいと思いました。
- ・友達の意見で見方が違うといろんな意見があってもいい。

【資料5 授業後の生徒の振り返り】

#### ④ 6月21日 道徳

##### 「街をきれいに 心をきれいに」(地域清掃活動)

道徳の授業が10回を終えたところで、ふと、「生徒たちに実践力が身につけているのだろうか?」という疑問が浮かんだ。そこで、隣の学級にも掛け合っ、学年で学校周辺の清掃活動を行うことにした。ゴミ拾いとなると「汚い、臭い、面倒臭い」といつて敬遠されそうだが、提案をすると生徒たちは意外にも前向きな雰囲気だった。活動の様子を観察していても、班のメンバーと協力しながら楽しそうに活動していたのが印象的だった。振り返りを見ても、「みんなと活動するとゴミ拾いが楽しく感じた」「もっと規模を拡大してやりたい」といった記述が多く見られた。

- ・もっと広く見てみるとさらにたくさんあると思います。またこういう機会があったら参加したいです。
- ・班で協力してゴミを見つけ出すのが楽しかったし、心がスッキリしていい気分だった。
- ・次は範囲を広くして時間を増やしてもっときれいにしたいです。こういうことを思えるようになったのは、自分の心が成長したんだなと思いました。
- ・今日の活動は楽しめたので、次も楽しめて周りがよくなっていく活動をしたいです。

##### 【資料6 授業後の生徒の振り返り】

#### ⑤ 6月29日 特別活動(学級活動)

##### 「かき氷プロジェクト」

大きな転機となったのがこの「かき氷プロジェクト」である。例年にない暑さとなった2018年の6月。穴水中の校舎は熱がこもりやすくとても暑くなる。エアコンも一部の教室にしか入っておらず、2年生の生活スペースである2階には1台もない。「この暑さなんとかならんのか?」という切実な思いから「エアコンをつけてほしい」という願いもあったが、それは自分たちではどうしようもできない問題だということで、自分たちでできる事はないかと考えた結果、このかき氷プロジェクトが立ち上がった。プロジェクトとして立ち上がったものの、生徒たちは経験がないので次の段取りがわからない。でもそれは仕方のないことなので、困っている生徒たちのサポートをしていった。

話が進むにつれ、生徒たちは、次なる課題に直面する。「氷はどうする?」「かき氷機はどうする?」「シロップは?」「トッピングはしてもいいの?」。かき氷機は班ごとに準備する、共用のものはまとめて準備するなど、全員で協議をしながら1つずつ課題をクリアしていった。しかし、氷の問題は、大きな壁となって立ち上がった。氷はプロジェクト成功の可否を大きく左右する重大な問題である。穴水中には製氷機がなかった。「それなら家から持ってきて貯めておけばいい。」という案が出てそれで収まりそうだったが、調べて見ると氷を保存しておける冷凍庫もなかった。困り果てた挙句、最終的にロックアイスを購入するという案で収まりかけたが、「先生、何かいいアイディアはありませんか?」と生徒たちから最後に助け舟が出されたので、知り合いの飲食店業者をお願いして分けてもらうことになった。

当日は、体育の後だったということもあり、暑さをしのぐという最大の目的を十分に果たすことができた。全員が積極的に関わり合い、達成感を得ることができた。のちの振り返りには、その充実ぶりがしっかりと記されていた。全員の振り返りを読み上げ、シェアすることで、より絆が強まったと感じている。

どうせできないだろうと諦めていたことが、みんなを力合わせて取り組むことで実現することができた。この経験は、他のプロジェクト実現に向けて大きな自信となった。

- ・実行当日、お皿をおさえてくれたり氷を分けてくれたりして、やっぱり友達は優しいなと思いました。疲れや暑さは、みんなの笑顔で吹っ飛びました。
- ・みんなの「成功させよう!」という意識が強かった。プロジェクトをやっているときの幸せさや楽しさが伝わった。
- ・他のプロジェクトでは色々意見が割れたりすると思うので、そういう時は自分たちで解決していった1つの答えを出せるようにしたいです。
- ・やりきった感、満足感など、やってよかったなと思いました。もっともっとプロジェクトを考えて協力してやっていきたいです。
- ・「絶対できない」と思っていたことができたので、これからなんでも挑戦していきたいです。
- ・小さいことから始めて最後にはお泊まり会などができたらいいなと思う。

##### 【資料7 授業後の生徒の振り返り】

### 3. Ⅲ期（夏季休業中）の実践

#### ～最大の挑戦 学校に泊まろうプロジェクト～

##### （1）企画の立ち上げ

6月のブレインストーミングの中に「お泊まり会」という記述があった。これを見て、何としても実現させたいという強い意志を持った女子数人を中心にプロジェクトチームを立ち上げた。これに対し、大半の生徒は「これはさすがに無理だろう…」と消極的だった。それでもプロジェクトメンバーは、かき氷プロジェクトの成功を自信に、実現を信じて具体的なプログラムを準備していった。

##### （2）準備

「食事はどうする？」「お風呂はどうする？」「寝る場所、寝具は？」「ただ泊まるだけじゃなく、意味のある活動を入れたらいいんじゃない？」プロジェクトを実現させるために、生徒たちはまず問題点を出し合いその解決に務めた。これまでの経験が自信となり、課題の発見と対応がスムーズになってきた。

##### （3）校長先生との交渉

実施するには、校長先生の許可が不可欠であることは当初から生徒たちもわかっていた。7月下旬、大枠が出来上がった段階で、校長先生にプレゼンをすることとなった。生徒たちは当然練習などすることなく、打ち合わせをして校長室へ向かった。しかし、いざ校長室へ入ると、緊張がピークに達したのか直立不動のまま誰も言葉を発せない。しびれを切らした校長先生が、何しにきたのか尋ねても、誰も喋れず沈黙が続く。さすがにいきなりハードルが高すぎたかと思い出直しを考えた時、一人の女子が口を開いた。すると他の生徒も続いて話すことができ、校長先生からの質問にも答えながら、条件付きでOKをもらうことができた。プレゼンを終わると、入室した時の表情とは真逆の達成感に満ちた笑顔があふれていた。

##### （4）実施

###### ①実施に向けて準備

夏休みに入り、生徒たちは職場体験学習や部活動、補充学習、体育祭練習など忙しい日々を送っていた。その合間を縫ってプロジェクトメンバーで声を掛け合って集まり、準備を進めてきた。1回2～30分程度だが、自主的に話題を決め話し合いを重ねて課題を解決していった。意見が対立することやまとまらないこともあったが、基本的に生徒だけで話し合

いを行い、準備を進めていった。教師はその様子を少し離れたところから見ているだけであった。

- ・ねらいを定める。  
→ 実態に即したものの、願いを込めたものにする  
ことを留意して考えた。
- ・予算、時間、環境を考えながら夕食・朝食のメニューを決める。  
→ 予算は500円／1人（飲み物代含）  
夕食はそうめん、朝食はホットケーキに決定した。
- ・ナイトスタディの計画を立てる。  
→ 宿題の完結、休み明けテストの対策  
グループごとに課題を決めて取り組むこと  
にした。
- ・レクレーションの内容を考える。  
→ 夜の学校でしかできないことをしたい・・・  
校内オリエンテーリング（きもだめし）に決定。
- ・寝床を作る。  
→ 男女のフロアを分けることが条件。  
男子は1F剣道場、女子は2F第一体育館と  
なった。敷布団の代わりに柔道用の畳やヨ  
ガマットを活用、その他必要な寝具は持参  
することになった。
- ・複数の先生に手伝いを要請する。  
→ 企画について説明し、協力してもらうよう  
お願いした。実際、男女合わせて6人の先  
生が協力してくれた。

###### ○ねらい

- 1 クラスの団結力を高める。
- 2 夏休みの宿題とテストに向けての勉強を  
みんなで協力して頑張る。
- 3 集団生活における団体行動を意識する。  
（修学旅行に向けて）

###### ○日程

- 8月30日（木）17:00～ 8月31日（金）12:00
- 1日目 夕食づくり ナイトスタディ  
レクレーション 就寝
- 2日目 朝活ボランティア 朝食づくり  
部活動 or 自主学习 シェアリング

#### 【資料8 生徒が話し合って決めたこと】

## ②1日目（8月30日）

いよいよ当日を迎えた。天候は雨。生徒の集合は17:00だが、プロジェクトメンバー5人は15:00に集まり、近くのスーパーに食材や飲み物の買い出しにいった。予算を考えて議論しながら検討し、予算通りに買い物をする事ができた。これまで子どもだけで予算を考えて買い物することがなかったので、とても楽しそうに活動していたのが印象的だった。



【写真8 プロジェクトメンバーによる買い出し】

17:00、無事全員が揃い活動が始まった。まずは寝床づくり。大きな畳を協力して運んだ。そして夕食づくり。班ごとに分かれて、そうめんとフルーチェをつくりはじめた。茹でただけで簡単にできる、暑さを凌げる、お腹いっぱいになるといった理由で決まったそうめんだったが、いざやってみるとハプニングの連続だった。茹で過ぎたり量が多すぎたりしてうまくいかない班が続出、それでも班のメンバーで話し合いながらうまく解決していった。どの班も最後の片付けまで協力して取り組むことができた。



【写真9 夕食づくり】

19:30、ナイトスタディ開始。夏休みの宿題やテスト対策などそれぞれの班で課題を決め、協力して学習に取り組んだ。ホワイトボードを活用したりわからない問題を教え合ったりする姿が多く見られ、と

ても充実した時間になった。勉強となるとどうしても構えてしまいがちだが、協力して楽しく勉強する経験ができたことは生徒たちにとって大きな気づきとなり、2学期以降の授業にも大きな影響をもたらした。



【写真10 ナイトスタディでの学び合い】

21:00、生徒たちが最も楽しみにしていたレクリエーションが始まった。校内オリエンテーリングということで、真っ暗な夜の学校の各部屋にある問題をグループで解きながら探索した。大きなトラブルもなく全員が楽しんでいた。

23:00、就寝の時間となった。外は大雨警報が発令されるほどの悪天候で風雨の音がうるさくなかなか寝付けなかった生徒もいたようだったが、寝転がりながら普段あまり話さない生徒と輪になって話をしたりゲームをしたりして楽しんだようだった。体調を崩す生徒も出ず、充実の1日目を終えた。



【写真11 剣道場に設置した寝床】

## ③2日目（8月31日）

5:30起床。身支度等を済ませ、6:00から朝活ボランティアの予定だったが、荒天のため中止となった。その代わりに、校舎内の清掃を行った。眠たさに負

けず、朝から黙々と作業に取り組んでいた。その後、1日目の振り返りを行った。昨日の頑張りや成果を振り返り、2日目の活動にフィードバックしていくことをねらいとした。

6:00 から朝食づくり開始。夕食と同じように班ごとに、ホットケーキをつくった。夕食づくりの経験が生き、役割分担がスムーズになったりコミュニケーションが増えたりした。

8:00 全体での活動は一旦中断し、部活動参加者、自主学习参加者に分かれた。自主学习参加者は、教室で各自の課題に取り組んだ。外は避難勧告が出されるほどの大雨が続き、1時間ほど経過した 9:30 になった段階で解散となった。部活動の生徒も終了し次第、解散となった。

#### (5) 振り返り

後日、改めて活動を振り返る時間を設けた。2日間の営みをじっくりと見つめながら振り返っていた。

- ・2日間、皆と活動して、仲がより深まったなど感じました。自分たちで考えて行動して学校で泊まることはすごく貴重な経験でした。ねらいもしっかり達成できたと思います。
- ・クラスで何か一つのこと協力して取り組むことはいいことかもしれないけど、ほとんど難しいのではないかと考えていました。なので今回、このプロジェクトを全員で行えたことが本当にすごいことだと思いました。
- ・私は、ナイトスタディときもだめしでクラスの団結力が高まったと思います。ナイトスタディではわからないところをみんなで話し合いながら解いて、きもだめしでは協力して問題を解いたりしてもっと仲が深まったと思ったからです。
- ・このプロジェクトをさせてくれた先生方に感謝したいです。
- ・みんなと協力するとできないこともできるんだなと思いました。これからはもっといろんなことにチャレンジしていきたいと思いました。
- ・今まで学校にお泊りする機会がなかったので、全部自分たちでしなければならぬ大変さや難しさを学ぶことができました。これを修学旅行、体育祭、文化祭などに生かしていきたいです。

#### 【資料9 活動を終えての生徒の振り返り】

## 4. IV期(9~10月)の実践

### ~学校行事(体育祭、文化祭)での飛躍~

#### (1) 学級の実態の変容

夏休みを終えた生徒たちの雰囲気はとてよく、達成感と充実感が感じられた。お泊まりプロジェクトをはじめ、部活動や補充学習などでも主体的に関わってきたことが大きいと思われる。加えて、9月には体育祭、新人大会、修学旅行、10月には文化祭といった大きな行事が控えていることもあって、みんなで頑張ろうという気持ちが高まっていったと推察する。授業も暖かく前向きな雰囲気の中で行われることが多くなってきた。

#### (2) 具体的な実践

##### ① 9月6日 特別活動(学校行事)

##### 「体育祭」

本校の体育祭は学級を解体して縦割りの団編成で行われる。生徒たちは、3年生のマネジメントのもとで活動をするが、一部、学級で取り組む種目(ムカデ競走、大縄跳び)も設定されている。生徒たちは学級種目での優勝を目指して取り組んだ。

練習時間がほとんどなかった中、日頃の生活や学級プロジェクトで培った団結力を発揮し、ムカデ競走で1位、大縄跳びで2位という素晴らしい結果を残した。生徒の振り返りからも、「みんなで頑張った」という達成感と次への意欲が伝わってきた。

- ・勝ち負けよりも、チームの心が一つになることで楽しくできるんじゃないかなあと思いました。2年2組はとてもいいクラスです。
- ・最初は声出しや動き方がわからずうまくいかなかったけれど、練習していくうちに全員でできるようになって行ったことが嬉しかった。
- ・2の2全員が輝いていたと思います。誰か一人だけではなく、クラス種目でも一人ひとりが声を出して全員頑張っていたと思うし、さらに団結力も深まったと思います。
- ・この体育祭でさらに一致団結できたので、次の文化祭やその他の行事につなげていきたいです。
- ・自分の仕事を丁寧に速くしっかりできたので良かった。来年は自分たちが中心になる番なので、今年よりもいい体育祭にしたい。

#### 【資料10 体育祭後の生徒の振り返り】

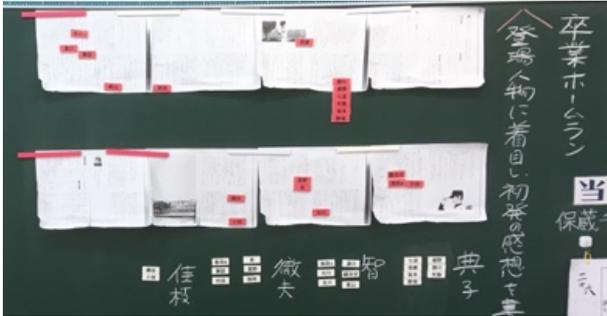
② 9月下旬～10月上旬 国語

「卒業ホームラン」

IV期は学校行事が中心となったが、国語の授業でも生徒の成長が感じられた。

9月～10月に行った「卒業ホームラン」の単元では、登場人物の人物像を探ることを目標に単元学習を行った。

○初発の感想から学習計画を立てる。

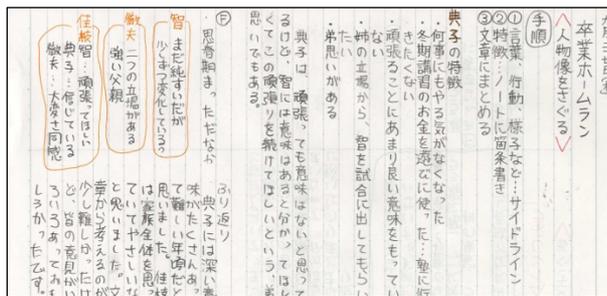


【写真12 初発の感想をもとに貼った付箋】

- 1 初発の感想をもとに単元計画を立てる
- 2 登場人物を1人選び、人物像をまとめる
- 3 登場人物の人物像を伝え合う
- 4 作品の主題（テーマ）について考える
- 5 単元のまとめと振り返り

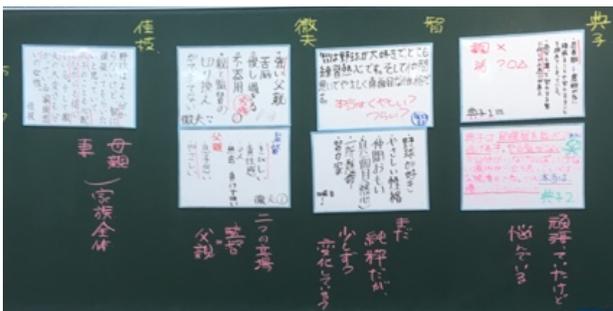
【資料11 生徒と立てた単元学習計画】

○登場人物の中から最も気に入った人物を一人取り上げ、人物像をまとめる。



【資料12 生徒のノート記述】

○同じ人物を選んだ生徒同士の関わり合いの中で人物像について掘り下げるとともに、他の登場人物を選んだ人に紹介する。



【写真13 授業後の板書】

- ・初めはあまり明るい感じはしなかったけれど、勉強をしていくと最後の部分でそれを变えていこうとする明るい方向に変わったと感じた。
- ・登場人物がそれぞれどのような人物像かをみんな交流してわかることができたし、徹夫の最後の一言も、どのような意味で言っているのかも考えることができました。
- ・自分では思いつかない考えもみんなから出てきてなるほどなと思ったし、交流することは大切だなと思いました。

【資料13 単元終了後の生徒の振り返り】

③ 10月27日 特別活動（学校行事）

「文化祭」

文化祭のメインは、学年発表（演劇）と合唱発表である。学年、学級での活動が多く、生徒はそれぞれの役割の中で仲間と協働的に活動に取り組んでいった。学年発表の演劇では、修学旅行で観てきた劇団四季の「アラジン」に感化され、それをもとにオリジナルの脚本を創作して取り組んだ。キャスト、スタッフなどの小部門に分かれての活動が多かったが、自分たちでアイディアを出し合い、自分たちで練り上げながら仕上げていった。クラス合唱でも、「先生を感動させる」というねらいから担任は関わらせてもらえず、自主的に練習に取り組んでいった。演劇も合唱も当日のパフォーマンスは素晴らしく、見る人に大きな感動を与えた。

- ・当日は、練習の時より緊張していたけど声を出すことができました。今までで一番いい合唱だったんじゃないかと思います。今年の文化祭は、頑張った分楽しいことがたくさんありました。
- ・劇の「アラジン」は、背景画、道具、音響、照明、衣装、キャスト、すべての係、すべての人が素晴らしくて輝いていました。
- ・劇の前に円陣を組んで気合いを入れ、終わった時みんな「ウォー！」と叫びました。みんなですごく良い劇にできたと思います。
- ・どんどんお互いに高め合うことができました。「この学年はすごいな」「この学年でよかったな」と心から思いました。これからもこの学年でいろいろなことを頑張っていきたいです。
- ・今年の文化祭はすごく充実していた楽しかったけど、来年は今年よりももっと楽しい文化祭にしたいです。

【資料14 文化祭後の生徒の振り返り】

## 5. V期(11月~12月)の実践

～さらなる飛躍、次のステップへ～

### (1) 学級の実態の変容

大きな行事も全て終わり、生徒たちは自分たちの大きな成長を実感している。集団としての満足感や帰属意識の高まりが授業にも良い影響を与えており、生徒同士の関わり合いや学び合いが自然発生的に行われるようになってきた。

### (2) 具体的な実践

#### ① 11月7日 特別活動(学級活動)

##### 「学級の成長を振り返ろう」

教室に掲示してある集合写真を見ながら4月からの営みを振り返り、思いをワークシートに書いていった。その後、全体でシェアリングし成長を実感するとともに、この成長をこれからの学校生活に活かし限られた時間を大切にしていこうと確認した。

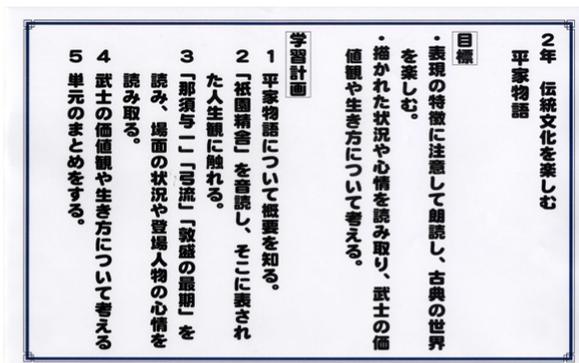
- ・今年は今までになかったことがたくさんあったと思う。その中でも特に8月に行われたプロジェクトが一番大きな変化を与えたと思う。そのプロジェクトから学級に対する考えを大きく変えることができたし、すごく良い体験をすることができたと思う。
- ・集団で行動することが多かったので、自分に今何ができるかを考えて行動できたことが最初に比べるとレベルアップしたのではないかと思う。
- ・行事や日が経つにつれて、団結力がより高まっていったし、みんなの雰囲気は柔らかくなっていった。
- ・先生にやらされるのではなく自分たちが協力してやるという力がついたと思います。普段の生活でも、仕事を忘れていたりすると声を掛け合ったりして、どんな時も助け合って頑張ってきたと思います。
- ・最後には、学級目標「虹・心・奏」にピッタリで一人ひとりが「このクラスでよかった」と思えるようなクラスにしていきたいです。

【資料15 生徒の記述から】

#### ② 11月上旬 国語

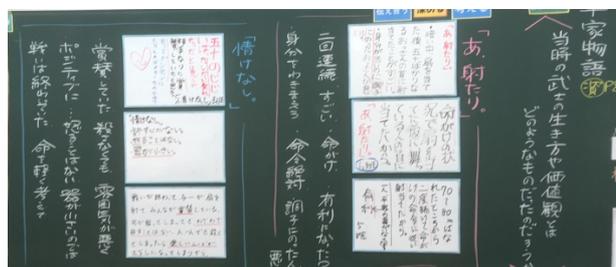
##### 「平家物語」

2学年の古典学習のメインとなる単元である。「武士の生き方、価値観に迫る」という単元目標のもと、学習計画を立てて単元学習に取り組んだ。



【資料16 単元の学習計画】

当時の武士の生き方は生徒たちに当然馴染みのないものであり、しかもそれを古典作品から読み取るのはなかなか難しい。それでも生徒たちは授業の中で議論を重ね、自分たちなりに紐解いていった。



【写真14 授業後の板書】

授業を進める中で生徒同士の関わり合いが授業の中心となり、生徒たち自らグループで考えたいという意思表示をするようになっていた。

- ・複数の意見を持ってみんなで議論するのはいいことだった。当時の武士の生き方がわかった。
- ・みんながいろいろな意見を持っていて楽しかったということです。まず自分の意見を持たないといけないし、それをみんなに伝えるということもしなければならない。みんながそれをしたから楽しかったのではないかと思います。
- ・両者どちらも正しいと思うことはあるから、どっちが正解というわけでもないと思った。
- ・自分の意見と同じ人もいれば違う人もいて深まった。(反対の意見は、)「なるほど!」と思うこともあれば、「うーん…」と思うこともあって楽しかった。

【資料17 単元終了後の生徒の振り返り】

#### ③ 11月28日 特別活動(学級活動)

##### 「誕生日サプライズプロジェクト」

この日は私の誕生日だった。自己紹介等で誕生日を紹介していたが、特に何かを期待するものではなかった。通常の1日のスタートだと思ったが、朝、

教室へ行くと、黒板がデコレーションされており、「誕生日おめでとうございます」といった言葉をたくさんもらった。「ああ、こういうことが自然にできるようになったのだなあ」と、とても嬉しい気分になった。

朝礼が終わり、1限目の国語が始まった。学習内容は小テストと次の日から始まる期末テストに向けた復習の予定だった。小テストが終わり復習に入るタイミングで、全員が立ち上がってHappyバースデーの歌を合唱し始めた。そしてサプライズセレモニーが始まった。動揺していると突然テレビが起動し、ムービーが流れ始めた。そこには、一人ひとりの写真とメッセージが綴られていた。級外の先生に協力をお願いしてみんなで作ったオリジナルムービーである。感動で涙が溢れた。その後、寄せ書きやアルバムをいただいた。心温まるプレゼントにも感動したのだが、このようなサプライズ企画を自分たちだけで考え実行したことに大きな感動を覚えた。これまでの営みによる集団としての成長が、このような形となって現れたと実感した。

この感動を保護者にも伝えたい、生徒にフィードバックしたいと思い、この日のうちに学級通信を作成して配付した。普段、学級通信にあまり興味を持たない生徒たちも、この日は満足げに眺めていた。

TETOTE

穴水中学校 2年2組学級通信  
 平成30年11月25日 第15号  
 文責：大久保 圭

#サプライズ学級プロジェクト!?



本日、11月28日は大久保の37歳の誕生日でした。期末テスト前日ということもあり、いつも通りの1日になると思っていたのですが、朝、教室へ行くときまさかのサプライズが準備されていました。正直、「おめでとうございます！」の声かけくらいはあるかなあと期待していましたが(笑)、想定をはるかに超えたサプライズに涙腺が崩壊しました。

1か月くらい前から準備していたと聞き、大変驚きました。しかもちゃんとプロジェクトの「企画書」まで準備したようです。でも、企画を実行するには担任のサインがいるはず…。それはどうしたのかと尋ねると、なんと松盛先生にお願いしたとのことでした。休み時間や放課後の時間を利用して準備したみたいですが、そんなことには全く気が付きませんでした。

サプライズパーティーは本当に嬉しいのですが、それ以上に君たちの成長に改めて感動しました。自分たちで企画を生み出し、自分たちでアイデアを出し合い、自分たちで創り上げるというプロジェクト学習のプロセスが身に付き、それを先生に気付かれないように実行したことは本当にすごいことです。4月からの成長が体現されたプロジェクトだったと思います。

歌、寄せ書き、アルバム、メッセージムービーと、たくさんのプレゼント、本当にありがとうございます。プレゼントももちろん嬉しいのですが、一人ひとりの気持ちがとても嬉しいのです。他者を幸せな気持ちにさせるには、相手の気持ちを理解すること、自分の気持ちを素直に伝えることが必要です。これはなかなか簡単ではないのですが、改めて振り返ってみると、みんなは先生の思いを日々の生活の中で十分に感じ取ってくれていますし、先生に対して自分の気持ちを素直に打ち明けてくれています。これまでの日々の小さな積み重ねが、今日の大きな感動につながったのだと思います。37歳、最高のスタートが切れました。そしてみんなの大切な思い出がまたひとつ増えました。これからも、みんなのために一生懸命頑張ります。感動をありがとうございます！

【資料18 配付した学級通信】

## V 考察

### 1. 各種アンケートの結果から

#### (1) 国語に関する質問

「国語の授業が好きですか」という問いに対し、4月段階では69.6%の生徒が肯定的に回答していた。12月段階で同じ調査をしたところ、肯定的な回答をした生徒の割合は95.7%であり、大幅に増加していた。また、「国語の授業の内容はよくわかりますか」という問いに対し、4月段階では65.3%の生徒が肯定的に回答していたが、12月段階では87.0%に増加していた。(表2)

このことから、国語の授業を自分たちで創り自分たちで進めていくことで授業が好きになり内容の理解にもつながっていったのではないかと考えられる。

		4月	12月
1	国語の授業が好きですか	69.6	95.7
2	国語の授業の内容はよくわかりますか	65.3	87.0

【表2 国語に関する質問項目と肯定的回答者の割合】

#### (2) Q-Uテストの結果の比較(5月と11月)

5月と11月にQ-Uテストを行った。

学級満足度尺度結果を比較すると、学級生活満足群はともに70%(全校平均37%)で差は見られなかったが、要支援群は9%から0%へ推移した。これらの結果から、集団としての変動は見られなかったため一見すると取組の効果はなかったのではないかと推察することができるが、5月段階の時点で高い値を示しており、これ以上の数値の上昇が難しい状況だったとも見てとれる。また、要支援群が0%になったことから、対象生徒の学級に対する不安傾向が解消されたと考えられる。

学校生活意欲尺度結果を比較すると、総合点の平均は5月が82.9点(90点満点中)、11月が83.6点(90点満点中)であり、差は見られなかったが、その中の「学級との関係」の領域で大きな変化が見られた。「学級との関係」を問う質問項目と、「はい」と回答した生徒の割合は以下の表3・表4のとおりである。これらの結果から、これまでの取組によって一人ひとりの学級集団に対する不安が解消され、集団に対する帰属意識や満足度が高まったことが推察される。

1	自分のクラスは仲のよいクラスだと思う
2	クラスの中にいるとホッとしたり明るい気分になる
3	クラスの行事に参加したり活動するのは楽しい
4	自分もクラスの活動に貢献していると思う

【表3 「学級との関係」を問う質問項目】

	全国平均	5月	11月
1	38.3	60.9	73.9
2	31.6	47.8	65.2
3	45.2	73.9	73.9
4	16.1	39.1	56.5

【表4 「はい」と回答した生徒の割合】

## 2. 振り返りの変容と学級目標の価値

これまで、各行事や様々な活動、毎時間の授業後などに「振り返り」の記述を行ってきたが、学級目標「虹・心・奏」を評価の指標として活用することで、自分たちの願いと活動が合致したものとなっていたかどうか、自分自身はどのように活動に関わることができたかを見つめることにつながっていった。これらの振り返りのキャリアを重ねることにより、「自分たちで……」「みんなで……」「これからは……」といった視点での表現や言葉が増えていき、新しい学習に入るときや行事ごとが行われるときなど、これまでの経験をベースにして自分たちでチャレンジしてみようという雰囲気が大きくなっていった。

- ・この学級はどんどんみんなで頑張っているということが強くなっていると思う。みんながやるべきことを果たし、自分の思いを言って、それを助け合うような学級にし、みんながこの学級でもっと成長できるようにしたい。
- ・これから更にみんなで協力して高めていきたい。人から見てもいい空気が感じられる学級なので、いい空気が教室に入ってからではなく教室の外にあふれ出るくらいのいい空気のある学級にしていきたい。
- ・3月には2年2組全員で笑顔で最後の日を迎え、「このクラスでよかった」と思える、そんなクラスにしていきたいです。

【資料19 生徒の振り返りの一部】

繰り返しになるが、本学級の学級目標は生徒の願いが込められたものであり、学級集団のシンボリックな存在である。願いの実現を目指してみんなで活動に取り組み、営みを振り返ることで学級目標の価値も高まっていったと考えられ、「集団での学び、成果を次の活動に生かす」といった集団のリフレクシオン能力の高まりにつながったといえる。

## VI まとめ

### 1. 結論

今回の実践を通じて、集団のリフレクシオン能力の向上には、その集団が安心安全な場であることとその上での特別活動と教科学習双方の充実が有用であることがわかった。ベースとなる人間関係づくりとリフレクシオンのプロセスを意識した特別活動・教科学習が連動したカリキュラムを計画的に設定することが、集団のリフレクシオン能力の向上に不可欠である。その上で、特質すべき点は以下の2点である。

#### (1) 心理的な安全の保障が集団のリフレクシオン能力向上のベース

学級の主体は生徒であり、教育活動を考える上での主語もまた「生徒」である。しかし、学級の主体が教師になってしまうと生徒の思いが反映されにくくなり、受動的になっていき主体性が育っていかない。ゆえに集団の居心地が悪くなり、集団としての機能が失われてしまい成立しなくなるといった悪循環に陥ってしまう。日々の教育活動が誰のためのものなのかを、今一度考えてみる必要があるのではないだろうか。

集団が目的志向の主体的な集団として成立するためには、目標について共通理解が図られていること、集団を構成するメンバーに心理的結び付きがあること、集団内で役割が明確に分化されメンバー間で理解されていること、メンバーが所属意識を持つこと、メンバーの個人的要求が認められること、集団内で総合に交渉することが許されることなど、様々な要素が重要であると考えられるが、これらの要素のベースとなるのが、集団の中に保障されるべき「心理的な安全」ではないだろうか。心理的な安全が保障されていれば、生徒は自分の思いを隠すことなく伝え合うことができ、協働的に歩みを進めることができるであろう。教育活動全体を通じて、「この学級

でよかった」「みんなといるとホッとすると」といった心理的な安全が保障された集団をつくっていくことが、集団のリフレクション能力の向上には必要不可欠ではないかと考える。

## (2) 特別活動と教科学習の価値

教育課程において、集団活動を最も意識するのが特別活動である。特別活動では、「望ましい人間関係」を形成すること、「自主的、実践的な態度」を育てることが共通の目標として設定されている。「望ましい人間関係」づくりの要素として連帯意識や帰属意識が考えられるが、これらは学級独自の取り組みを実践することによって自分たちの学校、自分たちの学級という「自分たち」意識が高められ、生徒同士の人間関係の深まりにつながっていくと考えられる。

「自主的、実践的な態度」とは、生徒が自分たちの行動について深く考えたり、感情や衝動を制御しつつ、決定した行動を状況に応じながら着実に遂行したり、現実に即して実行可能な方法をとったりするような態度のことをいう。これらを念頭に本学級の特別活動について振り返ってみると、学級活動の中核である「学級プロジェクト」や学校行事の中核である「体育祭・文化祭」はまさにこれらに当てはまる活動であったといえるであろう。実際に、振り返りの中に「自分たち・・・」という言葉や「みんな・・・」という言葉が増加していることから、特別活動を通して集団としての力が高まったと考えてよいだろう。

しかしながら、教育課程の中で特別活動の占める割合は圧倒的に少なく、授業・教科学習の占める割合が圧倒的に多い。そのため、特別活動だけをリフレクションの機会として捉えていては、リフレクションのキャリアの蓄積は望めない。割合の多い日々の教科学習によるリフレクションが蓄積されていくことで、リフレクション能力の向上につながったのではないかと考えられる。本研究でいう国語や道徳の実践がそれにあたる。

したがって、特別活動はリフレクションの大きな効果を得る機会、教科学習はリフレクションの経験を蓄積する機会であり、双方のつながりを意識することで相乗的に高められ、集団のリフレクション能力の向上につながっていくと考える。

## 2. 残された課題

本研究では、以下の点が課題として挙げられた。

### (1) 検証について

集団のリフレクション能力が向上したかどうかを見とるには、集団の中に入って感じる雰囲気や生徒の表情など数値化し難いもので判断することが多く、科学的な根拠のみでは測り難い。本研究では、検証指標をアンケート調査及び生徒の振り返りの記述の変容としたが、この検証が妥当であるか、妥当でないならばどのような検証方法があるのかを再考する必要がある。

### 引用文献・参考文献

- (1) 文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 (2016)「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて (報告)」
- (2) 文部科学省 (2008)「中学校学習指導要領解説国語編」. 東洋館出版社
- (3) 文部科学省 (2008)「中学校学習指導要領解説道徳編」. 東洋館出版社
- (4) 文部科学省 (2008)「中学校学習指導要領解説特別活動編」. 東洋館出版社
- (5) フレット・A. J. コルトハーヘン, 武田信子他 訳 (2010)「教師教育学—理論と実次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて (報告) 践をつなぐリアリスティック・アプローチ」. 学文社
- (6) 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2016)「学級・学校文化を創る特別活動【中学校編】」. 東京書籍
- (7) 杉田洋 (2009)「よりよい人間関係を築く特別活動」. 図書文化社
- (8) 河村茂雄 (2006)「集団を育てる学級づくり 12か月」. 図書文化社
- (9) 河村茂雄 (2003)「教師力 下」. 誠信書房
- (10) 澤田治夫他 (2006)「子どもとともに創る学校—子どもの権利条約の風を北海道・十勝から」. 日本評論社
- (11) 木村泰子 (2016)『『みんなの学校』流・自ら学ぶ子の育て方』. 小学館